

『大乘莊嚴經論』第 19 章 (功德品) 第 50 偈について

小 谷 信 千 代

唯識思想は、それを奉持する人々に対して与えられた呼称が「瑜伽行派 (yogācāra)」であることから明らかなように、瑜伽行の実践法に深く関わっている。にも拘わらず、唯識思想はこれまで、多くはアーラヤ識説や三性説の方面から論ぜられ、瑜伽の行法との関係からの考察は未だ充分になされたとは言えない。瑜伽行の実践過程における唯識説の担っている役割を明らかにすることによつて、従来のアーラヤ識説や三性説にもとづく唯識思想の理解を、新たに別の角度から検討し見直すことができないであろうか。以下に、唯識説を瑜伽行の観法の上に位置づけることを試みてみたい。

『大乘莊嚴經論』第 19 章功德品第 50 偈には次のように説かれている¹⁾。

現前に立てられた相と、自然に存在する〔相〕とを全て智者が観察する時、最高の悟りを得る。

purataḥ sthāpitam yac ca nimittam yat sthitam svayam /
sarvaṁ vibhāvayan dhīmān labhate bodhim uttamam //

現前に立てられた相とは、世親の Bhāṣya²⁾ に依れば、聞思修の加行によつて所縁とされたものであり、分別されたものである、とされている。安慧釈³⁾では、過去の聞思修等の加行にもとづいて、瑜伽行者が、即座に死屍や青瘀や骨鎖等の相を、現前に思い浮かべて立てたものである、と言われている。他方、自然に存在する相とは、Bhāṣya⁴⁾ に依れば、本来所縁となつているものであり、努力しなくとも分別されるものである。安慧釈⁵⁾では、それは、即座に思い浮かべて立てられたものではなく、衆生が無始時來の輪廻において損われていて、その為努力しなくても、瓶や布等として自ずから心に現われてくるものである、と述べられている。

つまり、現前に立てられた相とは、瑜伽行者が、その初歩的な段階で修習する不浄観等の観想の対象である死屍や青瘀等である。それに対して、自然に存在する相とは、瓶や布等の日常的な経験の対象である。

更に、これら二つを観察する場合には、先に現前に立てられた相を観察し、その後、自然に存在する相を観察する、という順序で行われることが、世親の

(62) 『大乘莊嚴經論』第19章(功德品)第50偈について(小谷)

Bhāṣya⁶⁾には注記されている。安慧はそれを次のように註釈している⁷⁾。「その二つを空として修習する順序は、最初に、現前に立てられた相である骨鎖等を空として観察する。どのように観察するのかと云えば、骨鎖等のこれらの顕現は、心における顕現にすぎず、真に存在しているわけではない、と観察するのである。〔次に〕瓶等の自然に存在するものを空として観察する。どのように観察するのかと云えば、骨鎖等は心における顕現にすぎず、自性があるわけではない。それと同じように、これら瓶等も心における顕現にすぎず、自性があるわけではない、と〔観察するの〕である。」

このように不浄観等の対象である骨鎖等を心の顕現にすぎないと観想することと、日常経験の対象をも心の顕現にすぎないと観想することの間には順序の存在することが注記されているのである。この注記は、「全ては心の顕現にすぎない」という唯識説が、瑜伽行の過程において担っていた役割を理解する一つの手掛りになるように思われる。

唯識説は、或る場合には、同一の対象がそれを認識する各人の過去の経験の相違によつて、それぞれ異つて経験される事実を説明するものと考えられたり、また或る場合には、瑜伽行者の心と対象とが一つになつた悟りの世界を説明するものと考えられたりする。唯識説をその原形において理解するために、如上の注記に従つて、上記の二つの観想に順序が設けられていることを念頭におきつつ、瑜伽行の最初の段階が修習される、「現前に立てられた相」である骨鎖等を対象とする不浄観等の観想において、唯識説がどのような位置を占めているかを考察してみたい。

初期の瑜伽行論書である『瑜伽師地論』や『解深密経』には、瑜伽行者がその初歩的な段階において、どのようにして止観の対象(ālabhāna)を尋求し、獲得し、修習し、そしてその果を得るに至るか、ということが詳細に説かれている。『瑜伽師地論声聞地』には、止と観(śamatha と vipaśyanā)とによつて初学の行者が瑜伽行を修習する仕方が説明されている⁸⁾。

それに依れば、先ず行者は対象を尋求することから始める。即ち、かつて聞法したり師から教えられたりしたことによつて見聞覚知した事柄の中から、何か一つを心の対象に決める。これは、まだ静慮に入っていない段階で行われる。この見聞覚知した事柄は、行者が知らなければならぬ物事・所知事(jñeya-vastu)と呼ばれ、その中には、死屍や骨鎖等の不浄や、慈悲、縁起、持息念、四聖諦などが入れられている。これらの物事の中から、行者は自分に応じたものを何か一

つ止観の対象として選ぶ。例えば、食欲の強い者は骨鎖等の不浄を対象として選ぶ、というように。

その後、彼は止(samatha)を行ずる。つまり静慮の心を生ずる。これは次の観(vipaśyanā)を行ずる時に、静慮地に属する作意(manasikāra)を必要とするので、前以つて静慮を生じておくのである。その次に彼は、骨鎖等の表象(ākāra・行相)が心の中に顕現するように、静慮地に属する作意によつて作意する。つまり、三昧に入つた心の働きによつて骨鎖等のイメージを心の中に現わし出すのである。それを勝解作意(adhimokṣa-manasikāra)と言う。この場合、彼の見ている対象は、骨鎖等の所知事つまり知られるべき事物そのものではなく、またそれに似た何か他の実体(dravya)でもない。それは、所知事に似た、心の中の顕現である。それ故、それは影像(pratibimba)と言われる。彼は、この影像を瑜伽行によつて成就して、その影像を検討し考察することによつて、所知事そのものをよく理解するようになる。このように、この影像は観の修習において考察の対象となるから有分別影像(savikalpa-pratibimba)と言われる。

『声聞地』では、この後に無分別影像を対象として行ぜられる止に関する記述が続く。しかし、ここでは瑜伽行における唯識説の原形を求めることに考察を限定するために、有分別影像を対象とする観(vipaśyanā)に関する説明をなお暫く検討してみたい。

『声聞地』はこの少し後⁹⁾に、影像を対象として行ずる瑜伽行の観法を、経を引用することによつて証明している。そこでは、上述したのと同じ内容の記述が少しなされて、その後次のように説かれる。「彼は、その見聞覚知したことに關して、静慮地に属する作意を以つて作意し、分別し、勝解する。彼は、その所知事そのものを〔自分と〕一体化し現前しているもの(samāhitaṃ sammukhībhūtam)としては見ないけれども、彼にはただ智にすぎず(jñānamātra)、或は見にすぎず(darśanamātra)、或は記憶にすぎない(pratiśmṛtamātra)所知事の影像(pratirūpakam)、もしくは、投影(pratibhāsa)が生ずる。」

この引用経の中で注意をひくのは、影像を jñānamātra, darśanamātra, pratiśmṛtamātra であると述べていることである。『声聞地』では、このように、瑜伽行者の対象は、影像つまり勝解作意という心の作用によつて心の中に現わし出されたもの、或は jñānamātra, darśanamātra, pratiśmṛtamātra なるものとされている。ここには、vijñaptimātra という語は用いられていないけれども、唯識説の原形が姿を現わしている。『解深密経』の分別瑜伽品¹⁰⁾では、止観の所縁を『声

聞地』と殆んど同じ仕方で説明しつつ、しかも影像をはつきりと vijñaptimātra である、と言う。この点に関しては、分別瑜伽品の方が『声聞地』よりも後の成立であることを思わせる。

さて冒頭に掲げた『莊嚴經論』の偈に戻る。いま見てきた『声聞地』に説かれていた有分別影像が、『莊嚴經論』では「現前に立てられた相」と呼ばれている、と考えられる。瑜伽行者は自分の心の中に静慮の力によつて生じた表象である有分別影像をよく観察し、習熟することによつて、その影像をいつでも即座に心に生ずることができるようになる。この観想を繰り返すことによつて、行者は観想の対象が、それを習熟した心においては即座に現われることを理解する。つまり、外界に対象が実在しなくても、観想の対象が恰も眼前に実在するかの如くに現前することに熟達する。

このように不浄観等の観法によつて、まず最初に外界の対象なしに認識の生ずることに習熟する。そして、『莊嚴經論』の世親の Bhāṣya によれば、以上のような「現前に立てられた相」を観察した後に、「自然に存在する相」即ち、我々の日常的な認識の対象である瓶や布等もまた、それを無始時來の輪廻において繰り返し経験してきた心の現われにすぎない、というように観察する。世親の Bhāṣya は、不浄観等の修習を實踐することなしに、いきなり我々の日常的な認識対象である瓶や布等を、唯だ識のみにすぎない、と見ることを示している。そして瑜伽行における唯識説の原形は、「観想の対象は行者の心のままに現わし出される」という命題として表わされている、と考えられる。

- 1) S. Lévi ed., *Mahāyāna-sūtrālamkāra* (Paris, 1968), p. 169.
- 2) ibid.
- 3) SAVBh, Pek. ed., No. 5531, Tsi, 242, b, 8-243, a, 1.
- 4) loc. cit.
- 5) SAVBh, 243, a, 1-2.
- 6) loc. cit.
- 7) SAVBh, 243, a, 4-7. 大正, 30, p. 427, a-b.
- 8) K. Shukla ed., *Śrāvakabhāṣī* (Patna, 1973), pp. 193-4. 声聞地の説明を解深密經に対する覺通の註釈 (SNSV, Pek. ed. No. 5845, Co, 175, a, 3-b, 1: 野沢静證『大乘仏教瑜伽行の研究』, p. 138-9) によつて補足した。
- 9) *Śrāvakabhāṣī*, p. 199. 大正, 30, p. 428, a-b.
- 10) É. Lamotte ed., *Saṃdhi-nīrmocanasūtra* (Louvain, 1935), Part II, p. 91, sect. 7. 野沢前掲書 (p. 206, n. 2) には Vijñāna-ālambanaṃ vijñapti-mātra-prabhāvitam という還元梵語が想定されている。

補註 1

冒頭に掲げた偈のC句中の“vibhāvayan”という語について一言しておきたい。この偈は漢訳では、「安相在心前，及以自然住，一切俱觀察，至得大菩提」と訳され、

Tib 訳では，“mdun bshag mtshan ma gañ yin dañ bdag ñid ḥdug pa gañ yin pa, thams cad rnam ḥjig blo ldan gyis, byañ chub mtshog ni thob par ḥgyur.”となつている。この語は、vi/bhū の caus. で、1) to think of, 2) be aware of, 3) see, observe minutely を意味する。漢訳 (Prabhākaramitra 訳)でも「觀察」と訳されている。しかし、Tib 訳では、rnam par ḥjig pa となつている。この語は Lokesh Chandra の Tib-Skt Dic. では、1) kapāla, 2) vidhvāmsana, 3) vinivartana, 4) vipralopatā, 5) vibhāvanā という対応 Skt が列挙されている。5) の vibhāvanā は今問題としている語なので暫く措くとして、1) の kapāla が「頭蓋骨 (skull)」を表わす以外は、2) も 3) も 4) も全て「破壊」を意味する。実際、動詞 ḥjig pa の意味は to destroy である。また、安慧釈中に引用されている箇所 (242, b, 7) でも、rnam bśig となつており、やはり「破壊」を意味しているように見える。Tib 訳はこのように、vibhāvayan を「破壊」という方向で訳しているようである。ところが、翻訳名義集 No. 6360 には、vibhāvanā が「破壊」という方向にも、「觀察」という方向にも訳されることを反映して、rnam par ḥjig pa ḥam rnam par sgom pa (漢訳、或観相、或観相)と記載している。偈や註釈の意味からすると、「破壊する・rnam par ḥjig pa」 という訳語は、觀察する仕方、或は觀察の内容を、より具体的に表現するために採用された訳語ではないか、と考えられる。安慧釈 (243, b, 6-8) では、空として破壊する (ston par bśig pa) という表現が、空として修習する (ston par bsgom pa) と言い換えられている。更にまた、bśig pa の pf. 形は bśigs であるが、bśigs は「觀察」の意味を有する gshig pa と同義に用いられる場合もある (S. C. Das, Tib-Eng Dic., p. 1080, gshig pa)。これらのことを考え合わせると、安慧釈の Tib 訳者は、vibhāvayan という語を「觀察する」という意味と「破壊する」という意味を共に含ませうような仕方で訳しているように思われる。

因にこの偈は、『撰大乘論』入所知相品 (佐々木本、漢訳、p. 55, Tib 訳、p. 88) に引用されている。

| | | | | |
|-------|--|-------|-------|-------|
| 玄 奘 訳 | 現前自然住 | 安立一切相 | 智者不分別 | 得最上菩提 |
| 笈 多 訳 | 安立及自住 | 所有現前相 | 一切不分別 | 智人得勝覺 |
| 真 諦 訳 | 現住及安立 | 一切相思惟 | 智人不分別 | 故得無上覺 |
| 仏陀扇多訳 | 在前隨所除 | 想念自住処 | 智尽不分別 | 得上菩提爾 |
| Tib 訳 | mtshan ma gañ shig mdun bshag dañ, gañ yañ | | | |

bdag ñid gnas pa rnams, kun la blo ldan mi rtog na,
byañ chub dam pa ḥthob par ḥgyur.

このように、Tib 訳は mi rtog pa と訳し、漢訳は四訳とも不分別となつている。

補註 2

大谷探検隊本によつて、長行の冒頭に、“evam akalpayan evam (A 本は eva) kra-mād iti vaktavyam.” という一文を補う。

(大谷大学助手)